

私はこの本を書きだすために、五六日まえから小旅行に出て、いま東京からあまり遠くない小さい町の質素な宿屋にとまっています。

ここは、ごく近くに有名な温泉町をひかえたところですが、この町じしんはかえつてそのために、遊山客などのまつたく寄りつかないところで、人気も景色もよく、なによりありがたいのは宿賃が安い。宿の人たちも素朴で人ずれのしていない、好みのよい人たちです。私はひさしぶりに静かな気持でこのエッセイのためにノートを書きこんだり、参考のために持つてきた本を読んだり、午後になると山道や海ぞいの道を散歩したり、ユツタリと湯にはいつたりして四五日をおしました。

私の持つてきた本の一冊に岸田国士きしだくに氏が敗戦後に最初に出した『日本人とは？』というのがあります。ごぞんじかと思いますが、岸田氏は戦争中に大政翼賛会の文化部の部長をしていて、そのために敗戦後パージにかかっていた人です。りつぱな人格をもった愛国者で、日本人としての

本質を色濃くもつていると同時に、フランス文化を自分の血肉になるまで吸収し、その二つが渾然と統一された、すぐれた劇作家です。教養のゆたかさと趣味の最さの点で、現在日本の文化人のなかで最高級の一人だろうと思います。

『日本人とは？』は岸田氏が敗戦後最初に書かれた評論だそうで、それ自体としてもひじょうにすぐれたエッセイ集であると同時に、前記のような経歴をもたれた岸田氏が敗戦からまもない時期に、パージ解放直後に書かれたものとして、彼の考えのエッセンスのところが真率に出ているという意味でも、岸田氏のこれまでの評論のなかでもすぐれたものだと思う。君にも一読をおすすめします。

ことに、その中でとりあつかわれている問題が、いま自分のエッセイ、をまとめようとしている私に

は、直接参考になる問題なので、ここにたずさえてきた数冊の本のなかで、示ちばん私の役に互つた

本です。私はこの「一両日ご」の本を熟読すること虹ついやし：今夕やつと読みおわりました。

この本の内容のくわしいことを、こゝ、ここに紹介している暇はないし、またその必要もないが、その十

輩の項目だけをならべると「大事なこととはア」、「日本人暗形説」、「平衡感覚について」

「精神の健康不健康について」、「恐怖なき生活について」、「悲しき習性について」、「人間らしさ」ということ、「歪められた対人意識について」、「いわゆる教育について」、「風俗の改革について」となっています。岸田が論じているのは、かならずしも敗戦後に暴露された日本人の姿にかぎら

れていない。戦争などに関係なく近代の日本人のものの考えかたや処理のしかたや生きかたなどのうえに顕著に現われている諸特性について鋭く、しかし懇篤な説得のしかたと、高雅な「ひかえめ」とをもつて論評をくわえてある。

もちろん、その本と題目の性質上、現在あるがままの日本人の諸特性についての岸田の見かたは、ほとんど否定的である。底に「当分のあいだ、これはどうしようもない」という深い嘆息がこめられている。同時に彼は、なんとかすればなんとかなるという希望をまったく捨ててはいない。全体的にそういう調子がある。それらの全部が私にたいへんよくわかり、同感された。

個々の問題についての彼の意見にも私は賛成できたし、ばあいによつてほとんど感動さえした。そして、日本人の大部分が岸田の意見を理解して実行したならば、日本という国にどんなによい国になるだろうと思つた。そして、岸田の意見は、かくべつ難解なものではなく、これを実行するにあたつてもそれほど非凡な能力や人格を要しはしない、ふつうの常識さえもつていけば、明日からでも実行できることばかりだ。だから、たぶんだんではそうなるだろう。岸田もそう思つているにちがいないし、読んでいる私もそう思つた。そう思つて私の目の前はいくらか明るくなつたような気がした。

それから私は夕飯を食べ、しばらくしてから宿の人にすすめられて湯にはいつた。小さくうすぐらく、全部が木でできた浴室である。

私は石やセメントやタイルでできた浴室よりも、このような木造のが好きだ。湯かげんも上々で、ユツタリとして湯につかつていた。そこへラジオがはじまつた。浴室の一方の壁が板一枚でできていて、そのむこうはすぐ宿屋の家族たちの居間になつていゝらしく、ラジオはそこに据え

であるようで、まるで手にとるように聞える。どこかの局のラジオ・ドラマである。

私もラジオ・ドラマを書いて放送してもらうことがときどきあるので、聞いていると、作者や演出者や俳優たちのたいがい、直接間接に知っている人たちだ。

ここに名は書かないが、やや通俗的ではあるが趣味のよい、しかも作品としてもていねいに書かれたホーム・ドラマふうのもののである。ふだんは忙しさにまざれてあまり聞けないラジオ・ドラマを、気持のよい揚につかりながら聞けるとは、ありがたいと思つて耳をすましていた。作品も演出もシットリと落ちついて、しかも何かおもしろくなりそうに展開しかけている。ところが、はじまつてから五分か六分たつて、ラジオのそばにすわっている人の一人だろう、かく舌打ちをする気配がして、スイッチがフイと切られ、ガーガーと別の演目をさがす音がしたあと、こんどは不意にニワトリがしめ殺されるような声がとびだした。

びつくりしていると、浪花節ななわがしだということがわかった。中途からだから演者も演目もわからないが、いきなり「一刀のもとに斬り殺して」という文句が出てくる。赤穂四十七士の大石クラノスケが、だれかと別れるといったような物語である。文句も節も声の出しかたも伴奏の三味線も、思いきり下品で、ほとんど醜悪にちかい。封建的なものの中でもつともやりきれないものを、もつとも下等な並べかたをすれば、こうもなるうかと思われるようなものである。耳をおおいたくなつたが、私はがまんして聞いた。

すると、醜悪は醜悪ながら、一種の妙な快感のようなものも、その中にあることがわかつてきた。それは、たとえば、自分の持ちものの中でいちばん下級のきたないもの、たとえば、泥や馬糞

のくつついたゾウリのようなもので、自分の横面をピシャピシャなぐられてでもいるような自虐的な快感——快感とはいえないかもしれないが、ほかに言いようのない、何か病的な実感である。

もちろん、がまんして聞いている必要上、そうなつたままでのだから、ホントはそれは快感などではない。一刻も早くスイッチを切つてくれるのがいちばんありがたいわけである。そしてたぶん宿の人はスイッチを切つてくれるだろうと思つていた。この四五日ちゆうに私の知りえた宿の人たちは、全部、ごく好みのよい上品な人がちで、ことに当主は大学を出たとか途中まで行つたとか聞いた、見たところもりつぱないインテリであり、これらの人たちが浪花節をそれほど好むようには、どうしても見えなかつたのだから。

しかし家族たちは満足しているとみえて、それまでしていた会話もあまりせず傾聴しているようで、最後までスイッチは切られなかつた。

湯につかつて、いやおうなしに最後のところまで浪花節を聞かされている私の精神状態は、拷問にかけられている状態とおなじであつた。そしてそのなかで、私は昼間読んだ岸田の本のことを思いだしていた。そうだ、たしかに岸田は正しく高く上等だ。それは私でなくてもだれもが認めるだろう。しかし岸田のような人間や岸田のような考えが、この浪花節と、どういう面で、どういう道筋でつながるのだろうか？

すくなくとも、このように多くかつ深く浪花節を愛好する日本人と、岸田の高い教養と知恵とは、どういふところで、またどういふキツカケで出あうことができるだろう？

もしかすると岸田がその本の中で、排除すべきもの、克服さるべきものとして否定されている日本人の「低さ」は、じつはまだ高すぎるのではあるまいか？ つまり岸田がその銃でねらつて

いる標的は岸田の「高級」な目に映った幻像であってホントの標的はもつと下の低いところにあるのではないだろうか？ 岸田が実際において敵としてたたかわなければならぬものは、岸田自身を設定しているような「半未開」な教養ではなくて、じつはまった未開な人間自体ではないだろうか？ つまり、浪花節や浪花節をよろこんで聞く日本人の性質こそ、岸田のたたかいの当の相手ではないのか？ そしてたぶん、さしあたり岸田に勝ち目はないのであろう。

と言うことは、もしかすると、日本人のなかの浪花節または浪花節的なものを、ただ低級にして唾棄すべきもの、まったく問題にならぬものと見ているであろう岸田（私なども同様であるが）の考え全部が、もしかすると、その土台のところでは何かひじょうに大きな「見ちがい」をしているか、盲点をもっているかとも思われる。もしそうならば、そのへんを私どもは、もういちど根こそぎ考えなおしてみる必要はないだろうか？……その他いろいろ考えたのである。そして私は湯からあがったのだが、なが湯のためと浪花節と自分じしんの乱れに乱れた考へのためにスツカリのぼせてしまっていた。同時に私の心は一種の深い恐怖のために、鳥肌立つような寒気を感じていた。

2

そして夜が更けて、私はふたたびこうして机にむかってすわっているが、私の心はまだ寒気を感じています。正確には、それは恐怖とはいえないかもしれない。違和とか不安とか焦燥とかいふのかもしれない。いや、しかしそんなものではない。たしかに恐怖です。恐怖という以外に

言いようはない。私はほとんどふるえながら、これを見つめているのです。岸田国土と浪花節をです。二つのもののあいだに決定的にできてしまっている裂けめをです。これを何かで埋めることができるのか？ いや、さしあたり何を持ってきても埋めることはできまい。いや、しかしもしかすると、これは埋めなくてもよい事かもしれない。埋めてはいけないのかもしれない。いやいや、しかしそうすると、日本人全体は、岸田国土の線にならぶ人びとと浪花節の線に添ってならぶ人びとの二つに永久に裂けたままで歩いて行くことになる。それでよいのか？

こんなことを考えて、恐怖を感じたりするのは、私の神経過敏のせいでしょうか？ そうかも知れない。しかしそれが病的なものであったとしても、私はこうなのだから、しかたがない。それにもとずいて何とか自分の考えをまとめなければならぬ。君はどうですか？

いち国民ちゆうの多数の庶民と、その国民のなかのごく少数の卓越個人とのあいだに、意見や生き方の相違がうまれるということは、どこの国にも、今も昔もあることです。しかしそれらはいがいのばあい、裂けめであるというよりも、ただ単に選択のちがい、個性のちがい、などと見てよいので、むしろ全体としてはその国民が内包している多様性のゆたかさと見ることができるといふような程度や種類のもので、また實際上、国民全体の総合的な歩みを片寄せたり、阻害したりはしないのです。

アメリカにベースボールのきれいな大統領ができてアメリカ全体にとつてなんの不都合もおきないだろうし、バートランド・ラッセルが、紅茶を好まなくてもイギリス全体にとつて何の欠けるところもない。また、かりに中国に新生活運動を指導している一人の学者がいたとして、それが中国人のマージャン好きをどんなに烈しく、またどんなにシツコク非難したとしても、それ

は国民ちゆうの進んだ層と遅れた層との間におきる討論または摩擦の現象であつて、裂けめとはいえないでしょう。

ところが、岸田国士と浪花節族とのあいだにあるものは裂けめなのです。たがいへの架け橋はないのです。断絶しきつています。岸田のはなつ理知と教養の言葉は、浪花節族に根本的に理解されないとともに、それゆえにまた、岸田の言葉は浪花節族への「理解されざる」軽蔑の言葉になつています。

同様に、浪花節や浪花節族のいつさいは、岸田の側から根本的に同感されないとともに、それゆえにまた、浪花節や浪花節族のすることなすことの全部が岸田にたいする「無言の」痛烈な罵倒または皮肉になつていゝのです。そしてもちろん、その数と根深さからいつて、浪花節のほうがか岸田よりも強い。いくら岸田が日本および日本人のためを思つて、どんなに歯がみするように説きたててもダメであります。つまり、これは第一に、さしあたり埋めようのない裂けめであり、第二に岸田のほう、つまり、より進んでいゝほうが負けであることが、わかつていゝということ。残念ながら、それは認めざるをえない。

さて、岸田岸田といつまでも引きあいに出して、同氏に迷惑をかけてはよくありません。人のことではない、問題は自分のことです。私は浪花節が大きらいで、岸田の意見に賛成です。君もたぶんそうだろうと思うが、どうでしょう？ もしそうならば、問題はわれわれじしんのことなのです。

さて、どうすればよいか？

わかりません。まつたくどうすればよいか、わからない。ただわずかに、日本の義務教育が根

本的に改革されたうえで、それで教育された子どもたちが父親や母親になり、それらが生んだ子どもたちが、さらに大人になつて、その生んだ子どもたちが大人になつたじぶんにおぼろげな希望がもてるといつたようなものかもしれませぬ。百年さきか二百年さきか、氣の遠くなるよな話です。恐怖から悪寒がするというのは、このことです。

では、こんな問題など投げ捨ててしまふか？ 裂けめがあろうとなかろうと、日本人が全体として統一されようとされまいと、ある日本人がある日本人にとつて外国人よりも縁どおいことになろうと、その結果日本人が日本人全体としての幸福を生みだしえないことになろうと、それもこれもかまふことはない。どうせ動物として生みつけられ、しかも自分の知らぬまにこの日本という、おかしな島に生みつけられてしまつたのだから、生きているあいだだけは、何となくゴシヤゴシヤと生きているだけで、それが美しかろうと醜かろうと、幸福であろうと不幸であろうと、統一がとれていようと混乱しきつていようと、バッハが鳴りひびこうが浪花節が唸りあげようが、そんなものだと思ひ捨ててやつていくか？ そうです、そういうステバチな氣持でもやつていけそうに思われることもあります。しかし、やつぱりそれは一時的なものです。結局は、いつまでもステバチにはなつておれませぬ。永久に投げ捨ててしまえるものではない。それが人間というものらしいのです。

また、百年でも二百年でも待たなければならぬものなら待たなければなるまいが、そのためには今日ただいま、その突破口の糸口でも見つけださないうちでは、すくなくとも見つけだそうと努力してみないでは、われわれはやつていけない。これも人間というものらしいのです。

私も、およばぬながら、それをしてみようと思ひます。君にむかつて書くこの手紙自体が、あ

るいは私のその種の努力だといえるかもしれないが、今夜は、さしあたり二つのヒントのようなものにかぎつて語つてみます。

その一つは、岸田もわれわれも浪花節的なものを軽蔑したり無視したりしているが、はたして岸田やわれわれがしているような意味でそれを軽蔑したり無視したりしてよいか、ということとです。

第二のことは、裂けめを埋めるためには、その裂けめをさきに発見したものが、むこう側へむかつて、なんでもよいから話しかけてみる必要があるかということとです。

3

第一のことについて。

さきごろ私の知っている人が、つぎのように言っていました。この人は教養のゆたかな誠実な男で、戦争中、召集されて一二年兵隊に行つていたが、話はそのときのこととです。

「戦争するのはもちろんイヤだし、兵営での生活や訓練は何から何までやりきれないことだらけでした。脱走するか、いつそ自殺しようかと思つたりすることがありましたが、それもできない。毎日毎日、一刻々々が、じつにもうやりきれませんでした。つまり兵隊語の（処置ねえ）情況です。そういうなかで、それまでかくべつ好きでもなかつた浪花節が急に好きになつていました。あの動物的な節まわしで、思いきつて下品な声をはりあげて、無神経きわまる文句を唸っていると、ピツタリときて、変によい気持なんです。なにかヤケクソみたいな、何がどうなつてもいい

ような、一匹の動物になつたような感じがして、その日その日に耐えていく元氣みたいなものが生まれるんです。野蛮な場所に耐えていくためには、こちらも野蛮にならなければならぬといふことなんでしょうか。」

この話の中には、いろいろの興味ある、ひじょうに深いことがふくまれているように私は思います。

人間には絶体絶命の壁の中に追いこまれて、その壁をハッキリと見て、さしあたり、どんなことをしても壁の外へは出られないことを知らなければならぬ瞬間がある。しかも、それでも生きていかなければならない。死ぬわけにはいかない。生きたいと思つたために生きるのではなくて、そのまえにすでに自分は生きてきていて、死ぬわけにいかないから、生きていかななくてはならないという関係。むずかしくいうと「実存」ということになるだろうが、人間はだれでも、そういう絶対の、実存の壁の前に立たされてしまう瞬間がある。いくら避けようとしても、ついに結局はこれを避けることは不可能らしいのです。そしてこの話をした人にとつては、そのときの日本の旧軍隊が、その一つであつたのです。

「処置ねえ」と言いながら、受身の形ではあるが、生きているからには、なんとか処していかなければならなかつた。そこには、自由な選択の余地はまったく残されていない。下手をすると、苦痛と絶望感が彼を発狂させ、窒息させるかもわからない。彼は、たとえなんともして、発狂と窒息から自分じしんを救わなければならぬ。

そのような瞬間に、本能的に人間のすることは、思いきつて自分という人間の最低のところ、

つまりもつとも動物的な線にまで飛びおりるといふことです。自分の感覚をもつとも低級なところまで引きずりおろして、それを自分で踏みにじることによつて、自分の頭脳がおちいつている絶望感や閉塞感と相殺しようとしたり、カタルシスをおこそうとしたりすることです。自虐、または自慰、または観念的な逃避、またはそのためにする酩酊などということができるかもしれない。

どんなふうに言われても、当人にとつては、どうでもよい。ブザマであろうと下劣であろうと野卑であろうと、そんなことを顧慮している余地はないのです。なんとしてでも彼は生きのびなければならぬのだから、どんなことでもできます。殺されかけた、そしてジツとしていればかならず殺されることを知っている野獣が逃げだしていく姿だといつてもよい。

そのような瞬間にぶつつかつたことのない、またはぶつつかつた瞬間の少なかつた人は幸福な人です。またかならずしもすべての人が、そういう瞬間にそんなふうになるとはかぎらない。なかには平常の自分——自分の理知と教養が自分にあたえてくれた高い安定——をすこしもくずさないような偉い人もいるでしょう。

しかし、たいがいの人は、そんなに、またそんなふうには偉くない。また、いくらそういう動物的な線に飛びおりても、かならずしも自分を救いだすことに完全に成功するとはかぎらない。

しかし、どうもふつうの人間は、そういう瞬間には、そういうことをしないではいられないものようです。そして、話をしてくれた右の人にとつて、そのときの脱出の道具は浪花節であつたわけです。そして、「なんとなくよい気持になり、やりきれない状態にたえていく抵抗力を生みだすことができた。」というのですから、浪花節は多少キキメがあつたことは事実です。

高いもの・純粹なもの・すぐれたものが、低級なもの・猥雑なもの・汚れたり、腐敗したものでよりもよいものであることはまちがいません。それは疑えない。それを疑えば人類の歴史は逆転し、人類がこれまで創りだしてきたものは崩激する。しかし、ある種の人びとは、ある危険な瞬間に、かならずしも高いものや純粹なものや優れたものなどからは救われずに、低級なものや腐敗したものや動物的に粗野なものなどから救われる。

このことの中には、ただ、それを逃避とか混迷だなどといつてしまえない、深い微妙な問題がふくまれていると思います。

私はここでいろんなことを思いだします。ボードレーが悪と腐敗のなかに美と救いを見いだしたことなどを語ると、それは十九世紀末のデカダンのふるめかしい教義だと君から笑われるかもしれない。たしかにそれは一種の特殊な病気であつたにちがいないが、ボードレーを病気にしてしまつた病源が千九百年のところできいになくなつたわけではないともいえます。すでにストイシズムの権化のようになっていた老トルストイが、チェホフとゴールキイを前において何時間もぶつつづけに身ぶり入りで淫売あそびの話をした話。アンドレ・ジイドのコンゴウ旅行を、彼がヨーロッパ文化の食傷から自分の食欲を救いだすためには、アフリカ奥地の自然と人間の極度に低級で粗野な姿に身をもつて接してみなければならなかつたという企てくわたくであつたと見る見かたもなりたつのではないか。

ベルリオーズがシンフォニーの作曲にうみつかれ行きづまつて、もう作曲するのはよそうかと思いながら悄然として歩いていると、貧民の葬式が通りかかり、ただ一ちようのラッパだけが下手くその葬送曲を吹いていく、それを聞いていて「ああ、音楽というものはいいものだ！」と叫

んで、生きかえつたようになり、ふたたび作曲に立ちもどつたという話。その他いろいろ。

——これらは偉い人たちの有名な話ですが、ふつうの平凡な人たちのあいだにも、粗野なものや低俗なものから救われた話はいくらでも拾いあげられる。私などにもよくそういうことがあります。

行為においても、思想においても、趣味においても、少しでも高く、少しでも純粹に、少しでも優れたものになりたいと思つて私は努力しているのですが、かならずしもそれらはうまくいかない。失敗することのほうが多い。すると、われながら自分の至らなさにガツカリと疲れはて、やりきれない絶望的な気分でションボリと外を歩いたりする。そういうときにガツガツと骨をかんだり、雌犬のあとを目の色をかえて追いかけていたりしている犬の姿を見たりすると、ヒョイト「そうだ、自分と犬とどれだけちがうものか。自分も動物だ。犬のすることは自分もしてよいのだ。また、それ以上の何が自分にできるだろう。急に飛びあがるようにして、高くなるうとしたり純粹になろうとしたりしたためにガツカリするのはやめて、そこから始めよう。」と思つて、わずかに絶望のなかから自分を救いだし、てくることができることがある。

現在の自分の下等さにたいする口実や弁解ではなく、このように下等な自分でもなお、あるびれずに生きて、少しでも上等になるよう努力しつづけてよろしいという「ゆるし」を受けたような気持である。

また、こんなことも思いだします。真夏のカンカン照りのなかで過激な労働をしている土工なぞが、たがいに猥語を投げかわしたり、通りかかった若い女にむかつて、おいせつな言葉でからかつたりすることがあります。はたから聞くと、じつにイヤな不愉快な気持がするものだが、し

かし、じつは当の労働者たちは、それほどの悪意やわいせつの意味をこめてしているのではないのです。私は青年時代にその種の労働をしたことがあるので、それがわかります。

彼らは耐えがたいような暑さや疲労や単調さに追いつめられているのです。やりきれないのだ。でも仕事を放りだすことはゆるさされていない。なんとか自分で自分の気をひきたてながらやつていかななくてはならない。そのための刺激として、わいせつなことを言ったり女をらかつたりするのです。はたから聞いたものには想像もできないくらいむじゃきな気持でしていることが多いのです。――

さて、あれこれと取りとめもなく書きましたが、私が浪花節、または浪花節族を弁護しようとしていると思つてもらつては困ります。まえにも書いたように私は浪花節がきらいだし、日本から浪花節、また浪花節的なものを一日も早く徹底的に追いはらわなければならぬと思つているのです。ただ、追いはらうための方法やそれにとまなう困難さの種類や度あい、岸田国士はじめ、たいがいの文化人たちが感じているものと私の感じているものとが、かなり違うらしいという事です。

一般大衆は、文化人たちのように、「教養」や「観念」の緩衝衣を身につけていない。生活はジカに彼らの素肌にヒリヒリとくいついてくる。時代の波は、なんの仮面もつけずにムキツケに直線的に彼らを追いつめる。その痛みや息苦しさを、教養で中和したり観念で翻訳したりすることは、彼らにはできない。しかしなんとか処理しなければやつていけない。動物的に強烈で、本能的、感覚的、つまり「低級」なものにつく以外にない。その一つが浪花節、または浪花節的なものではないかということなのです。

この間の事情を、われわれは理解する必要があると思うのです。大衆がそのようにならざるをえない理由にたいして、われわれは敬意を払いつつ考えなければならぬと思うのです。

少なくとも、軽蔑し無視してはなりません。そんな資格はわれわれにない。なぜなら、われわれ文化人とても、われわれの持つている程度の教養や観念では防ぎのつかない絶体絶命の場へ追いつくめられると、思いがけない下等なものや本能的なものや素朴なものに取りすがらなければならぬことがないとは言えないからです。少なくとも私などだいたいそうなりそうです。

それは私のもっている教養や観念がホンモノでない証拠だとも言えるでしょうが、しかしホンモノの教養や観念をもっている文化人——たとえば、失礼ですが、岸田氏などでも、朝目がさめて食べるものが一つもないような情況に追いこまれたり、ザンゴウの泥の中で、つぎの瞬間にはかならず死ななければならぬことを知ったときなどにも、彼がふだんの生活で示している統一と調和のとれた高い趣味——そうです、現にこの『日本人とは？』のなかに一貫して示されている節度とポーズなどから逸脱して、もつと本能的な、もつと「下等な」姿を示さないでいられるでしょうか？ いられないだろうと断言する勇氣は私にない。しかし、いられるだろうとも私には言えないのです。

人間は脳髓を持っていると同時に糞袋や性器も持っています。糞袋や性器が脳髓よりも高級とは言えまいが、脳髓よりも糞袋や性器が下等なものとしてあつかわれるならば、そのような見かたやあつかいかた自体が、じつは二重に下等で低級なものです。われわれはふつうよくこのような二重の下等さと低級におちいりやすい。文化主義者たち（岸田氏もその一人です。）も、じつは自ら知らぬまに、そのような二重の下等さと低級におちいつているのでは

ないでしようか。

一国民の中の少数の文化人と多数の大衆とのあいだの乖離かいりの現象についても同じことが言えると思います。知識者が大衆の低級を笑つてそれを捨て、それからはなれ去るのは、知識者当人にとつては、さしあたりやむをえぬことかもしれぬが、じつは二重に低級なことでしょう。ばかりでなく、それは大衆の低級さをいつまでも低級さとして放直しておく結果になる。その低級さを高級に引きあげるキツカケを見つけるみちを永久に閉ざすことになる。つまり知識者のそのようにはなれ去りは、妙な形で、大衆の低扱さの存続を助長することになるということです。

さらに重大なことは、そのようにして知識者から見捨てられた大衆は、そのままでファシズムまたはその他の全体主義のための最適の地盤になりうるという点です。

もつともよい例は、ヒットラーにひきずられていったドイツ大衆は、第一次世界大戦の敗戦直後の混乱の中で、ドイツのすぐれた少数の知識者たちから見捨てられた大衆であつたのです。低扱さのゆえをもつて大衆を見捨てて知識者は、そのことによつて、野蛮な絶対主義に大衆を引きわたすことになり、それによつて大きな罪をおかすことになります。

もつと手ぢかなことは、この日本の現在までの、四五十年間の政治の歴史をふりかえつて見ましよう。もつともファシヨ的な政治がしかれた時代々に、それを推進した反動的政治家たちが、つねにその拠点や地盤にしたものは、知識者から見捨てられた大衆でした。つまり浪花節的な大衆だつたのです。現在にしてもそうです。まったく浪花節的な政治家が、浪花節的な大衆にむかつて、浪花節をうなりたてて反動のほうへ持つていこうとしています。そうされまいと思ふならば、知識者は浪花節のゆえをもつて大衆を見捨ててはならないのです。

とはいつても粗野は粗野だし、下等は下等だ。それを今さら好きになれと言つても、むりです。私の言うのは、それから耳をふさぎ、駆けさつてはなるまいということです。そして、大衆が浪花節や浪花節的なものに引かれる理由や原因の深いもの、つまり大衆の生活の実相に、もつと謙虚に目をそそぎ、つかむことが必要です。そして、われわれの耳に、それがどんなに拷問的に不快にさからつたとしても、もつとたびたび、われわれは浪花節を聴かなくてはならない。自虐のためではない。もつとたびたび聴けば、われわれの嫌悪や否定的な批判は、ついに言葉でか顔つきでかかならず、外へむかつて大衆にたいして示されないということはありません。

それによつて、実際的にわれわれと大衆のあいだには、浪花節の是非や美醜についての討論がおきる。討論でわれわれがそう簡単に勝ちをしめるだろうとは思われない。たぶん、なんども、なんども負けるだろう。しかしついには勝つ。すくなくとも勝ちうるチャンスをそのうちには見つけるだろう。またすくなくとも、そのような実際の討論の過程のなかで、浪花節的なものという材料をとおして、大衆の持っている力強いものとわれわれの持っているよいものを流通しあうことによつて、たがいに高めあつたり強めあつたりして、ついには浪花節的なものの本質を別のものに変質させてしまう望みをもつことができよう。

裂けめは、そのようにして埋めはじめることができると私は思います。妙なことですが、浪花節をホントにもつとも早く追いはらつてしまうためには、どんなにイヤで不愉快でも、忍耐力と勇気をもつて、当の浪花節と浪花節的なものに傍聴しなければならぬということです。

第二のことは、裂けめに気づいた知識者が、むこうがわの大衆にむかつて、まず声をかけてみるということだ。

いったい、人に声をかける、話しかける、対話をはじめるときの皮切りをするということのなかには、ふつうに考えられているよりも大きな深い意味があります。仏教でいう「縁」をこしらえるというような意味だけでなく、この世の中で人と人とをむすびつける紐帯を生みだし、それによつて社会というものができあがる——その一ばんの根本のところには、かならず他への話しかけがあります。君と私とが、まずどちらからか声をかけてみなければ、君と私は友人にはならなかつた。隣村の人に最初に行きあつた人がまず「今日は、よい天気だ。」と話しかけたために、村と村との交流がおきた。

人と人がともに同じ災厄のために叩きのめされて困つてるときや、また、人が山奥にふみ入つて自己を自然の中に没入させているとき、つまり人間がもつとも純粹に人間であるときには、人に会うとすぐに声をかけたくなるし、かけられる。遠く山道に一人で行きくれたときなどに、むこうの峯から「オーイ」とか、「ヤッハウ」とかの掛け声ながれてくるのを聞いてよろこんだ経験のある人には、わかることです。それは単にさびしいからとか心ぼそいためとかいうよりも、もつと何か深い意味をもっています。それについては、また機会があつたら、すこし突っこんで書いてみたいとも思っています。

ほかの人に話しかけてみるということは、たしかに人間の徳です。そして話しかけてみるといふことは、人がオシヤベリになるといふことです。それがばあいによつてデシヤバリになること

にもなります。もちろんよい意味です。われわれ日本人はムツツリしすぎます。控えめでありすぎます。必要でもないときには、ずいぶんオシャベリになつたり出すぎるくせに、それが入用なときには、石のように固くなつたり恥かしがつたりしてものを言わず、簡単にやれることをしないですごしてしまふ。とくに知識人にこれがひじょうに多いのです。

私は敗戦直後の地下鉄の車内で、つぎのようなことを経験したことがあります。その箱の中は、おそろしくこんでいて、ギッシリつまつたまま乗客は身動きもできず、電車が動揺するたびに身体が押しつけられて痛むし、呼吸が苦しい。それがつらく不愉快であるために、全部の乗客がたがい怒つたような顔をして、ムツと口ひとつきかぬため、車内は、へんにしずかである。

するうち、電車は一つの駅にとまり、新しい乗客が、また二三人押し乗つてきたために、そのへんが、またミシミシと押したり押しかえしたりしはじめ、苦しさがさらにひどくなつた。そのとき、私から四五人さきの中老の男が、ふいに機嫌のよいトンキョウな声をあげて、「おつとつと！ 押すのもいいけど、これじゃおまえさん、おれが十八九の娘でもあつてみなよ。こんなに腹や腰を押されたりもまれたら、家へ帰つて十月とつきしたら、子どもが生まれるよ、ホントに！ ねえそうじゃありませんか。」と、あたりの人びとを見まわしながら笑つた。あたりの人びともドツと笑いだした。私もふきだした。そして、その直後、ヒョイと気がつくつと、だれ一人おりたわけでもないのに、周囲から押してくる力が急にかるくなり、自分の身体がズツと楽になつていた。はかの人たちもそうらしい。おたがいに押しあう力がなごんでしまつて、あちこちで笑い声がしたり、軽快な会話がはじまつていたのです。

私は感心してその中老の人を見た。よく練れた明るい顔つきをした人で、腕のよい職人といつ

た人体にんていの、どうふんでも知識人ではない。世間にもまれて苦勞をつんできた人の知恵は格別のものだと思います。

とにかく、私にはそういうばあいにはそんなことはできなかつたし、じつは思いつきもしなかつたのです。ほかに知識人らしい人も多かつたが、それらにも、そんなことはできなかつた。ただ目前の困つた情況に洩面をつくつて、氣持をこわばらせて、いきいきとした氣ばたらきを失つていた。なかには、何かを話しだしてみることを思いついた人がいても、氣がるに言いだせなかつたのです。

このようなことは、小さいことのようにでいて、じつはひじょうに大きなことです。今後の日本の社会にとつて、憲法をどうするかとか、再軍備をどうするかなどの問題に匹敵するくらいの、いやある意味ではそれ以上に重要なことかもしれません。『日本人とは？』の中で岸田も似たようなことを再三再四書いています。

そうです、似たようなといえ、その『日本人とは？』の中に、つぎのような個所があります。
(「人間らしさということ」一五七ページ)

「ついせんだつてのこと、汽車の中で、一人の専門学校の生徒が通路に立つたままで本を讀んでいたところ、急激な車体の動揺のために重心を失い、片手をかたわらの座席の背へもつていくはずみに、そこへ腰をかけていた老紳士の頭を横なぐりに肘でこづいたらしい。あつという間もな
いできごとである。

『どうもすみません。頭をさげているその学生と、それにはなんとも答えず、さも言語道断であるといわぬばかりに肩をゆすり口をとがらし、額に三角の皺をよせて学生をにらみつけ、しかも

その表情であたりの人びとの顔を眺めまわしながら、威厳だけはくずすまいとしている老紳士との対照が、私にはじつに異様に感じられた。

学生はいつたん恐縮はしたが、相手のとりつく島のない態度にすつかり度を失い、おまけに周囲の無表情な視線に取りかこまれてやりきれなくなり、じりじりとその場から遠ざかった。

無理もないことである。が、ひるがえつて一方の老紳士の心理とその態度とについて考えてみると、これはまたなんと『人間らしからざる』すがたを示していることであろう！ 私はこういう人物をいちばん軽蔑しないではいられない。そして、こういう人物が、われわれのあいだにはひじょうに多いのである。

悪意はむろんなく、過失といつてもほとんど不注意とさえいえないほどの、だれにでも起りがちなソコツである。たとえそのために自分にどんな災害がおよぼうと、とつきの不快感に自分の感情のすべてを支配させ、それを当の相手にぶつけて、それでよしとしていられることは、よほど『人間として』はどうかしているのである。」

まったく岸田の言うとおりでと思います。つぎにこう書いてあります。

「その学生のやり場のない目が、もしかりに、そのとき、周囲の人びとの視線のなかに、『気をつけたまえ、君は運がわるい。とんだ人の頭がそばにあつたもんだ。』と言いたげに笑いかけると、目を発見したとしたら、彼はまことに救われるであろう。人間は、つねに自分の周囲にそういう目を求めているのである。人間の心がふれあうというのは、小さい例ではあるが、そういうときのことをいうのである。」

これも岸田の言うとおりで。岸田も、話しかけると言っているのです。口で話しかけること

ができないときには目で話しかけると言っているのです。まったく賛成です。しかし私が岸田の文章を引用したのは、ただ彼に賛成するただけではありません。私にとつて、もつと重大な、もつと興味あることを指摘したいためです。それは、そのとき、それをかたわらから見ていた岸田じしんはどうしていただろうということですか。（ことわつておきますが、これは岸田のアゲ足とり、またはそれに類する気持をミジンもふくまぬ話であります。）

岸田はこの小事件を見ていた。なるほど、その学生のためにとりなしてやることは、だれにとつても、そういうばあいできにくかろう。しかし岸田じしんが言っているように、学生に目で笑いかけてやることはできたであろう。岸田はそうしたであろうか、そうしなかつたであろうか？ わからない。が、学生が「やりきれなくなり、じりじりとその場から遠ざかつた。」とあれば、たぶん岸田はそうしなかつたのではないのか。もしそうだとすれば、ここに大きな問題があるように私には思われるのです。

「人間らしく」ない老紳士の存在や、小事件を見ていながら最後まで無表情であつた周囲の人びとのことも重大ですが、さらに重大なことは、それを傍観し、正しい判断しセンスをもちながら、それを言いだし話しかけようとしなない知識者の存在そのものです。

知識者が、そうなりやすい理由はわかります。まず、自分がものごとを考えすぎたり感じすぎたりする、つまり過敏だということをも自分で知つていられるために、それをただちにおもてにあらわすのを控えめにする習慣を身につけている。

つぎに、想像力や感情移入の能力が発達しているために、老紳士その他の人びとがそうなつていられる状態がある程度まで「わかる」ために、それについてアツサリものが言えなくなり、こちら

がわじしんの腹の中が、ゴタゴタとひじょうに複雑なものになつて、言いそびれてしまふ。気がよわいとか、はずかしがりやということも大きく作用していると思います。それ自体としては、別にそれほど非難すべきことではないでしょう。

しかし、一般知識者のこのような習慣のために、大衆と知識人とのあいだの裂けめができ、またはそのために、裂けめがいつまでたつても埋まらないとするならば、日本の知識者は、このことによつて客観的にはひじょうに大きな罪をおかしています。なぜならば、明治以来の近代日本の悲劇は、すべて根本において、この裂けめのために起きたのだと言えるからです。

それは、たとえば、板垣退助いたがたいすけの言つたことが、もう少し当時の大衆の耳にはいつていたならば、それから福沢諭吉ふくざわゆきちの言葉が、もう少し当時の大衆に理解されていたならば、その後の日本の歩いてきた道はかなり違つていただろうと考えただけでも、思い半ばにすぎるのです。

卓越した個人は日本に数多くいたのです。いまでもいます。ただそのあり方が、大衆の平面上にトツコツとそびえ立つていたのです。ヨーロッパやアメリカにおけるように、ピラミッド形になつた大衆の、その、ピラミッドの内側の頂上に近いととろに、卓越個人がいるというふうにはなつていない。これが、少しずつでも何とかなつていかなければ、日本の近代化といつたり民主主義化といつたりしても、すべてむなし。

それにはまず、なにはともあれ、つとめてキサクに知識人のほうから大衆のほうへむいて声をかけてみることに思う。話しかけてみることに。対話をはじめること。オシャベリになり、デシヤバリになること。すぐに言葉が通じなくとも、そのために、そこら一面にガガヤとやかましくなつても、また、いちおうはいろいろの混乱がおきても、かまわないと思うのです。第一その

ほうが知識人当人にとつても幸福なのです。

頭の中だけでいろいろのことを考えたり感じたりするだけで、フクラすずめのように不機嫌に、またシヨンボリとして大衆の中にすあつているよりも、なんでもよい、思いついたことを周囲の人に話しかけてみると、自分の気持も打ちひらけ、それにつれて自分の考えもいきいきと動きだします。

ちかごろ問題になつている、日本国民の共通の広場といつたようなものも、そういう手ぢかな、知識人各自が、自分のやり方をホンのすこしばかり変えていくところから、あんがい早くひちけてくるかもしれないと思うのです。

底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954 (昭和29) 年4月25日初版発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年3月11日